企業スポーツと経営

強いチームへ意識改革

京都市に本社を置く日本新薬の硬式野球部は1955年の創部以来、今年で59年を迎えた。社会人野球の最高峰とされる都市対抗野球大会には31回出場し、94年の第65回大会は第3位に輝いた。また、社会人野球日本選手権大会にも17回出場し、計6回のベスト8入りを果たしている。この間、プロ野球選手も輩出し、名実ともに実力派のチームに成長。今年はドラフト会議でも10年ぶりに指名を受けた。

都市対抗野球大会で声援を送る日本新薬の応援席

監督自らスローガン

長い歴史を誇る硬式野球部にとっても、昨年は大きなターニングポイントになる年だった。都市対抗野球大会の近畿地区予選で敗れ、それまで12年続いてきた本戦出場が途切れたからだ。主力選手が抜け、新人7人が加わる端境期とも重なり、十分なチームづくりができなかったのも一因だった。

「本戦に出場さえできればいいという甘えはなかったか。改めてチームが一丸となり、強い組織づくりを目指したい。目標はずばり、全国制覇です」

岩橋良知監督はそう力を込める。入社した89年から8年間、硬式野球部で内野手として活躍した。退部後は同社の営業職に転じ、近畿地区の営業所長などを歴任。昨年12月、6年間監督を務めた前任の田村秀生氏からチームを引き継いだ。

監督自らが毎年、チームが目指すべきスローガンを掲げるのも硬式野球部の慣習だ。そこで新たな目標として岩橋監督が打ち出したのが「意識改革」。

「強いチームが必ず勝てるわけではありません。まずは選手の気持ちを一つにして一生懸命プレーすることがなにより重要になる」と語る。

その思いに重なるのが岩橋監督自身、選手時代に出場した第65回都市対抗野球大会だ。

日本新薬・硬式野球部 ㊤

10年ぶりベスト8入り

初戦の相手は前年度の優勝チーム、日本石油（現・JX日鉱日石エネルギー）。下馬評でも初戦敗退は濃厚だったが、2対1で競り勝つとチームは勢いに乗って準決勝まで駒を進め、チーム最高位となる初のベスト4進出を果たす。「まさに選手たちの気力の賜(たまもの)だった」と振り返る。

岩橋監督は昨年の地区予選敗退後、日本新薬の前川重信社長からチームに宛てた手紙を受け取り、そのメッセージを選手たちにも伝えた。そこには「強い組織をつくるのは仕事も野球も同じ。明確な目標を決めて頑張ってほしい」と、厳しくも温かい激励の言葉が書かれていたという。この思いを形にしようとチーム一丸となって練習に

今年のドラフト会議で、DeNAから3位指名を受けた倉本寿彦選手。日本新薬では10年ぶりのドラフト指名だ

励んだ結果、今年7月に開催された都市対抗野球大会では10年ぶりのベスト8入りを果たした。

硬式野球部からはこれまで巨人や中日などで活躍した梅田邦三氏、阪神とロッテで活躍し、現在は阪神の打撃投手を務める橋本健太郎氏らのプロ野球選手も誕生している。1974年にドラフト4位で近鉄に入団した吹石徳一氏もその一人だ。現役引退後は近鉄のコーチや楽天のチーフスカウトなどを務め、2013年に日本新薬にアドバイザーとして復帰した。昨年1月から硬式野球部のヘッドコーチを務めている。吹石氏は「野球に打ち込める環境が整っているのが硬式野球部の大きな魅力。今年はチームの仕上がりも良く、コンディションをうまく保てば、いい結果が期待できる」と語る。

また、今年のドラフト会議では内野手の倉本寿彦選手がDeNAから3位指名を受けた。ドラフト会議で選出されるのは、04年の橋本氏以来だ。

硬式野球部のOBを中心に大学や高校球界に監督やコーチなど多くの指導者を輩出しているのも日本新薬の特徴だ。1956年から10年間、監督を務めた長谷部栄一氏は母校の東山高校（京都市）の野球部監督として春の甲子園に2回出場し、仏教大学硬式野球部の総監督も歴任した。現役時代、都市対抗野球大会に10回出場した原田英彦氏は93年に母校の平安高校（京都市）野球部監督に就任し、これまで10回の甲子園出場を果たしている。（今西富幸）

▶明日は「理念と体験、仕事に生かす」

企業スポーツと経営

理念と体験 仕事に生かす

セカンドキャリア支援

「人生に野球の心を！」。日本新薬（京都市）の森下弘・元会長が硬式野球部創部30周年時に現役選手やOBらに贈った記念の盾に刻まれている言葉だ。野球を通して培ったものを人生にも存分に生かしてほしいとの思いが込められている。硬式野球部の理念であり、選手にとっては野球と仕事を両立する指針にもなっている。

「野球も人生と同じ。この理念は仕事にも大いに生かされています」

そう語るのは硬式野球部の岩橋良知監督だ。1989年に入社した当時、野球部員として森下会長から直接、この言葉を聞き、薫陶を受けたという。

スポーツと仕事の両立は実業団チームに課せられた課題だが、選手への手厚いセカンドキャリア支援を行っているのも、日本新薬の特徴だ。選手がチームを退くと、一般社員と同じように営業職などで現場を体験することになる。

岩橋監督も8年間の選手生活を経て29歳から営業職に転じた。自社の医薬品情報を医療関係者に提供するMR（医薬情報担当者）になるための研修を半年間受け、大阪支店に配属。主に得意先の開業医や総合病院を回る業務に従事し、近畿地区の営業所長なども歴任した。初めての営業職だけに戸惑いの連続だったが、このとき役立ったのが硬式野球部時代の体験だ。

㊧「野球に専念できる環境に感謝したい」と語る岩橋良知監督
㊨プロ野球選手時代は近鉄でプレーした吹石徳一ヘッドコーチ

「学生時代に野球経験のある医師も多く、社会人野球の体験が人間関係のネットワークを大きく広げてくれた」と言い、病院の野球チームの助っ人として地域の大会に出場したこともある。そして16年に及ぶ営業生活を送っていた2013年、ヘッドコーチとして再び硬式野球部に復帰し昨年12月、新監督に就任した。

そんな岩橋監督だが「選手のときは野球に専念できたので感謝の思いでいっぱいです」と現役時代を振り返る。

日本新薬・硬式野球部 ㊥

硬式野球部の選手は午前中、各自の職場業務に従事すれば、午後は原則、練習に参加できる。特に大会前の強化練習や合宿時には１カ月近くも職場の業務が免除されることもあり、硬式野球部の斉藤均部長は「会社としてチームを積極的にサポートしており、選手にとってはまさに野球が仕事と言える環境を整えている」と語る。

地域の教育にも注力

それだけに試合成績への評価は厳しい。昨年度からは選手の活躍度を〝見える化〟する選手評価制度も導入した。監督が選手の個別面接を行い、年度ごとのチーム目標と選手個人の達成目標を明確化させる。これに基づき、打率や盗塁数などに応じて活躍度を５段階にランク化し、獲得したポイントを毎年の賞与額に反映させるシステムだ。岩橋監督は「試合での活躍が目に見える形で評価されるので、選手のモチベーションにも前向きな影響を与えている」と指摘する。

少年野球チームを対象に開催される野球教室。選手が子供たちを熱心に指導する

一方、硬式野球部はCSR（企業の社会的責任）活動の一環としてスポーツ振興を通した教育支援にも力を注いでいる。その一つが毎年11月頃、部のメンバーが京都府内の高校球児に実技指導を行う講習会だ。また、少年野球チームを対象にした野球教室を地元の京都だけでなく、製剤工場を置く神奈川県小田原市でも開催している。

岩橋監督は「野球の魅力を次世代に伝えるとともに、地域全体の野球レベルの向上にも貢献したい。選手にとっては人間力を高める場にもなっています」。まさに企業人は地域住民の一員でもあるという〝企業市民〟の実践だろう。斉藤部長は「硬式野球部への信頼が会社への信頼にもつながっていく」と話している。（今西富幸）

▶明日は「勝利すれば士気も向上」

企業スポーツと経営

勝利すれば士気も向上

医薬品や機能食品事業を展開する日本新薬（京都市）は2014年3月期に売上高、最終利益ともに過去最高となり、今年度から5年間の新中期経営計画では「売上高1000億円以上」「年平均成長率8％以上」という新たな目標を打ち出した。「実業団チームは企業経営と同様、勝利することが大事だ」と語る前川重信社長に企業スポーツが果たす役割や会社にとっての意義などについて聞いた。

率先して試合会場に

――硬式野球部は今年で創部59年。その歴史を振り返ると

「日本新薬は2019年に創立100年を迎えるが、硬式野球部も同様に長い歴史を歩んできた。過去には厳しい事業環境にさらされたこともあるが、全社一丸となってチームを応援しながら支えてきた。その結果が現在につながっていると思う」

――実業団チームの目的は何か

「『人生に野球の心を！』とは故・森下弘会長が残した言葉だが、野球は仕事にも通じるものがあり、一生懸命努力すれば必ず報われるのだと私なりに理解している。もちろん、実業団チームである以上、やはり勝利することがなにより大事だ。これは企業経営も同じで、勝つためには曖昧な気持ちでは通用しない。このため、日本一を狙える強いチームづくりを行っていくことが重要だ。今年はドラフト会議で10年ぶりに倉本寿彦選手が指名されたが、プロになれるレベルの選手を育成していきたい」

――硬式野球部が社内にどんな影響を与えているのか

「企業経営と同様、勝利することが大事」と語る前川重信社長

「都市対抗野球大会や社会人野球日本選手権大会などで選手が活躍することで社員の一体感が醸成され、勝利すれば、会社全体の士気の向上にもつながっていく。また、それが企業認知度を高めることにもなり、ひいては会社の業績や企業イメージにも前向きな影響を与えていると思う。全国大会の試合では毎回、全社的に特別応援団を組織するなど、社を挙げてサポートしている。私自身も時間が許せば、率先して試合会場にかけつけるようにしている」

日本新薬・硬式野球部 ㊦

選手評価制度も導入

――強いチームをつくるために行っていることは

「現役時代は野球にウエートを置いてもらい、競技に専念できる環境を全社的に整えているが、もちろん、試合成績は厳格に判断する。このため、昨年度から選手評価制度も導入した。選手ごとに試合での活躍を数値化し、そのポイントに応じて賞与に加算するというシステムだ。選手にとっては野球が仕事であり、その意味でのプロ意識を持ってもらいたい」

「一方、選手のセカンドキャリアサポートに力を注いでいるのも当社の特徴だ。選手は現役を引退すると原則、MR（医薬品情報担当者）として営業職を担当してもらう。この点、スポーツ選手は礼儀正しく、負けず嫌いで向上心もあるので、仕事現場では各方面からおおむね高い評価を得ている。近年はこうしたセカンドキャリアサポートに魅力を感じて入社してくる選手も多く、リクルート面でもいい効果が表れている」

都市対抗野球大会で応援にかけつけた前川社長（中央）

――CSR（企業の社会的責任）の観点からも大きな意義があるのでは

「まさにそうだ。病気で困っている方々に福音となる医薬品を提供し、より多くの人々の健康に貢献する。それが日本新薬の経営理念であり、硬式野球部はこの企業イメージにも合致していると思う。この観点から、中高生や少年野球チームに技術指導を行う講習会を毎年、定期的に開催している。いろんな形で支えて下さる地域のみなさまへの恩返しという思いもあるが、なにより自治体の代表として存分に活躍することが私たちの使命だ。社会にとって存在意義のある企業を目指し、硬式野球部もトップクラスになるようにたゆまぬ努力を続けていきたい」

（今西富幸）

企業スポーツと経営

強いチームづくりで五輪代表輩出

ワコール女子陸上競技部㊤

ワコールの女子陸上競技部は来年で創設30年を迎える。「スパークエンジェルス」の愛称で本社を置く地元・京都市民をはじめ、陸上ファンに親しまれる存在だ。全日本実業団対抗女子駅伝では大会記録となる4連覇を達成。ナショナルチームのメンバーで次期ブラジル・リオ五輪への出場を目指す福士加代子選手らを輩出し、日本陸上界を牽引するチームとしても期待が高まる。

創業者の思い受け継ぐ

女子陸上競技部ができたのは1986年。京都の陸上界は有能な選手を出しながらもチームの〝受け皿〟がなかったため、当時、京都商工会議所会頭を務めていたワコール創業者の塚本幸一社長が創業40周年を迎えたこの年、「京都から強いチームを」との思いで立ち上げたという。

チームはこの期待に応えるように創部4年目にして全日本実業団対抗女子駅伝で初優勝を飾り、92年まで4連覇を達成。95年にも5回目の優勝を果たした。優勝に貢献した真木和選手は92年のバルセロナ（女子1万㍍）、96年のアトランタ（女子マラソン）と2大会連続で代表に選ばれ、文字通りの黄金期を築く。

現在、チームを牽引するのは2代目の永山忠幸監督。指導歴は16年目に入るが、就任した2000年当初は真木選手ら主力メンバーがすでに退社し、一からの再スタートを余儀なくされた。特にヘッドコーチとして臨んだ前年の淡路島女子駅伝はいまも脳裏に焼きついているという。この大会は全日本実業団対抗女子駅伝への予選も兼ねていたが、9位に終わり、常連だったそのキップを逃した。それだけに「強いチームをつくるために何をすべきか。監督として自分自身を成長させる原点にもなった」と振り返る。

史上2人目の快挙

次世代のエースに成長するのが、永山監督自らスカウトに出向いて獲得した福士選手だ。青森県の高校を卒業後、2000年にワコールに入社するとトラックレースや駅伝で頭角を現し、3000㍍、5000㍍の日本記録、ハーフマラソンのアジア記録を樹立。五輪では04年のアテネ、08年の北京、12年のロンドンといずれも女子1万㍍に出場し、弘山晴美選手と並ぶ3大会連続代表選出という史上2人目の快挙を果たした。

「一戦ずつ着実に成長を続けてきた選手。自己記録の更新に向け、必ずサプライズを起こしてくれる」

永山監督の〝福士評〟だが、08年に初めて挑戦したマラソン（大阪国際女子マラソン）では新たな課題も浮き彫りになった。30㌔付近まで2位集団を引き離す独走が急激にペースダウン。何度も転倒する中、監督から「もうやめてもいい」と止められながら執念で走り切った。結果は19位と惨敗。準備不足のため、十分なスタミナ補給ができなかったのが敗因だった。

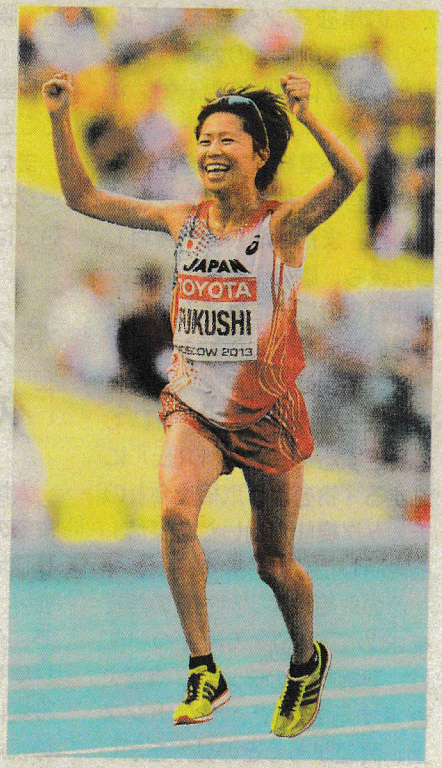
永山忠幸監督

永山監督はこの結果をチーム全体の課題ととらえ、常に本番を意識したケニアやエチオピアなどアフリカ勢のトレーニング方法を普段の練習にも導入。また、競泳の五輪金メダリスト、北島康介選手らへの〝勝負脳〟の指導で知られる脳医学者、林成之氏のアドバイスを受けながら、選手のメンタル強化を図ってきた。この結果、福士選手は13年の世界陸上競技選手権モスクワ大会・女子マラソンで見事、銅メダルを獲得。樋口紀子選手も11年の東京マラソン女子部門で優勝を果たした。

「結果が全て」と言い切る永山監督。福士選手に続くエースの育成がチームの今後の課題だという。

「ワコールの選手に求められているのは単に日の丸を背負って走ることだけではありません。どんな成績が残せるか。それこそが問われているのです」。そう力を込めた。（今西富幸）

2013年8月、モスクワで開催された世界陸上競技選手権女子マラソンで3位でゴールする福士加代子選手



企業スポーツと経営

社員としての〝自主・自立〟意識醸成

ワコール女子陸上競技部㊦

ワコールの女子陸上競技部「スパークエンジェルス」の選手は一般社員として入社し、大会遠征や合宿時以外はそれぞれの配属先で通常業務にあたるのが基本だ。選手がレースに出場するときは所属部署の社員が数百人規模で応援に駆け付け、会社の結束力を高める場にもなっている。

選手は一般入社が伝統

チームのメンバーは現在8人。福士加代子選手はアテネ、北京、ロンドンと3大会連続で五輪に出場し、2013年の世界陸上競技選手権モスクワ大会では女子マラソンで銅メダルを獲得した。日本陸連がブラジル・リオ五輪でのマラソン復活を掲げ、昨春発足したナショナルチームのメンバーにも選ばれている。

選手は個別契約ではなく、一般社員として入社するのがワコールの伝統だ。選手の発掘はスポーツグループの事務局が担当。毎年、インターハイなどの主要大会を視察してリクルート活動を行っており、今春から新たに4人の高校生がチーム入りする。

どんな選手に期待するのか。女子陸上競技部のゼネラルマネージャーを務める信山一弥スポーツグループ長は「即戦力ではなく、むしろ3年後、5年後を見据えた伸びしろを重視しています。選手としてどれだけ強くなりたいか。その志はもちろん大切ですが、ワコールの社員として〝自主・自立〟の意識を育める選手であってほしい」と強調する。

選手は寮で共同生活を送りながら、年間の約3分の2を占める大会遠征や合宿などに参加する時以外は始業前を練習時間にあて、午前9時から午後2時までそれぞれ所属する持ち場で仕事をこなす。ディーラー向けの内覧会などのイベント開催時には、選手が商品の仕分けや展示の手伝いを買って出ることもある。2000年に入社して以来、ウエルネス事業部で事業企画課の業務を担当する福士選手は「職場の仲間と一緒に現場で仕事をしながら、会社に貢献できるのがとてもうれしい」と語る。

信山一弥スポーツグループ長

結束力高める応援ツアー

国内の主要大会や予選会が開催される時は本社や事業所、関連会社が応援ツアーを企画。毎年12月、宮城県で行われる全日本実業団対抗女子駅伝には400人以上の社員が応援に駆け付ける。「チームの勝利への思いを託し、さまざまな部署の社員が垣根を越えて一つになれる貴重な機会」と信山スポーツグループ長。今春から社内有志による私設応援団を結成し、選手と交流する機会も増やしていくという。

女子陸上競技部の永山忠幸監督は「会社全体で温かく見守っていただき、感謝しています。選手がそれぞれ自己記録を更新し、社員の方々の熱い思いに応えていきたい」と力を込める。

一方、選手の競技活動を〝見える化〟する貢献賞制度も導入している。大会の知名度や成績、自己記録更新の有無などを基に活躍度をポイント化して賞与に上積みする方式だ。加算ポイントは半年ごとに集計して各選手別にプールし、退部時に全額が支払われる。

ワコールは「女性共感企業」を掲げ、乳がんの早期発見・早期治療を支援するなど、CSR(企業の社会的責任)活動にも力を注いでいる。この理念は女子陸上競技部の活動に反映され、選手たちは地域のマラソン大会や合宿先のゲストランナーとして地元の人たちと交流を深めたり、警察署や消防署のポスターにも登場。また、女子陸上競技部のホームページには応援メッセージの欄を設け、日々の活動を発信するなど陸上ファンとの交流を図っている。

信山スポーツグループ長は「選手の活躍こそ、チームを支えていただいている多くの方々への恩返しになる。その期待に応えるためにも努力を続けていきたい」と話している。(今西富幸)

大会に駆け付け、選手への応援メッセージを掲げるワコール社員

産業翻訳の
株式会社 新日本翻訳センター
メディカル 特許 工業
URL:www.shin-honyaku.com
スペシャリスト。

企業スポーツと経営

企業のチャレンジ精神 走る姿で体現

ワコール女子陸上競技部(下)

「選手の活躍が商売にも前向きな影響を与える」と語るワコールホールディングスの塚本能交社長

「世の女性を美しく」。ワコールが創業以来、貫いてきた企業理念だ。中期経営計画ではグローバル企業への進展を掲げ、ヨーロッパやアジアを中心とした海外展開にも力を注ぐ。一方、国内では昨年10年ぶりに新たな下着ブランドを立ち上げた。「失敗を怖れず、成功を自惚れない」（経営の基本方針）チャレンジ精神は女子陸上競技部にも受け継がれている。実業団チームを持つ意義などについて、ワコールホールディングスの塚本能交社長に聞いた。

結束力高めるきっかけに

――女子陸上競技部は社長就任前年に発足し、まさに同じ歴史を歩んできた。来年創部30年を迎えることへの感慨は

「当社の女子陸上競技部は他社のチームと比べて人数が少なく、昨年の全日本実業団対抗女子駅伝では新入社員まで走らせた。自社グラウンドも持っていないなかで30年間、ほんとうに一生懸命頑張ってきてくれたと思う」

――一番印象に残っているレースは

「福士加代子選手が初マラソンに挑戦した2008年の大阪国際女子マラソン。私も沿道で応援して声援を送った印象深い大会だ。30㌔を過ぎてから急に失速して足がまったく動かなくなり、監督から『もうやめてもいい』と声をかけられたが、意識がもうろうとなりながらも最後まで走りきった。彼女の姿勢に大きな感動をもらい、スポーツの厳しさも教えてもらったような気がする」

――会社にとってチームはどんな役割を果たしているか

「職場の結束力や連帯感を高めるきっかけになっている。北海道から沖縄まで事業所があるので、主要な大会には本社や事業所単位でバスを出して現地に駆けつけ、沿道でわが社の旗を振って応援したり、最後はゴールする選手をみんなで見守りながらエールを送る。普段は接する機会の少ない社員同士、お互いの目線を合わせることができるし、同じ目的に向かって汗を流すのはとても大きな意義がある」

「選手が走る姿はまさに当社のチャレンジ精神を体現するものになっている。彼女たちがいい結果を出せば、営業先でも話題になるし、商売にも前向きな影響を与えてくれる。女子陸上競技部を持っていること自体、社員の誇りになる」

選手でも特別視しない

――選手は一般社員より優遇されているのか

「選手だからと言って特別視はしないのが原則。だから強い選手を特別枠でリクルートするようなことはしていない。ワコールという会社に興味があるかどうかが一番重要なポイントになる。チームのメンバーは選手の個別契約ではなく、一般社員として入社してくるので当然、入社式には他の新入社員と一緒に出席する。ただ、仕事の量はどうしても一般社員より少なくなるので、アスリートとしての結果を数値化して賞与に上乗せする形で評価している」

――チームの活躍が企業活動にもたらす影響は

「乳がんにかかる方を少しでも減らすために支援活動を進めている。女子陸上競技部が活躍すれば、こうした啓発活動をより多くの方々に知ってもらう機会が増えることにもつながるはず。CSR（企業の社会的責任）の観点でも大きな意義があると思う」

「ワコールは女性に支えられている会社だ。女性管理職の比率も20%近くまできており、また、昨年には初の女性役員も誕生した。女性社員には今後ももっと活躍してもらいたいと考えているが、女子陸上競技部の存在はいい相乗効果をもたらすのではないか」

（今西富幸）